山の上の木と雲の話

小川未明

青空文庫

山の上に、一本の木が立っていました。木はまだこの世の中に生まれてきてから、なにも見たことがありません。そんなに高い山ですから、人間も登ってくることもなければ、めったに獣物も上ってくるようなこともなかったのです。

ただ、毎日聞くものは、風の音ばかりでありました。木はべつに話をするものもなければ、また心をなぐさめてくれるものもなく、朝から夜まで、さびしくその山の上に立っていました。同じ木でも、にぎやかな都会の中にある公園にあったならば、毎日、いろいろなものを見、またいろいろな音を聞いたでありましょう。しかし、この木はそんなことがなかったのであります。

夜になると、遠くで獣物のほえる声と、永久に黙って冷たく輝く星の光と、いずこへともなく駆けてゆく、無情の風の音を聞いたばかりであります。

しかし、この木にただ一度忘れがたい思い出があるのでありました。それは、ある年の夏の夕暮れ方のことであります。あんなに美しい雲を見たことがありません。その雲は、じつに美しい雲でした。にこやかに笑っていました。体には、紅・紫・黄・金・銀、あらゆるまばゆいほどの華やかな色彩で織られた着物をまとっていました。髪は、長く、黄金色の波のようにまき上がっていました。その雲は、おそらく大空の年若い女王でありましたでしょう。ゆうゆうと空を漂って、この山を過ぎるのでした。

木は、魂まで、ぼんやりとして、ただ夢心地になって、空を見上げていました。

「なんという美しい雲だろう。あんな美しい姿のものが、この宇宙にはすんでいるのだろうか？」

と、木は思って、ながめていました。

すると、その雲は、ちょうど木の立っている山の上にさしかかりました。木は、見上げれば、見上げるほど美しいので、気も遠くなるばかりでした。このとき、ちょうど、鈴を振るような、やさしい声をして、雲は下を見て、

「ああ、まっすぐないい木だこと。風にも、雪にも折れないで、よく育ちましたね。ほんとうに強い、雄々しい若い木ですこと。どんなにこの山の上に一人で立っているのではさびしいでしょうね。しかし、忍耐をしなければなりません。わたしは、また、きっと、もう一度ここへやってきますよ。それまでは、達者でいてください。いろいろのおもしろい話や、珍しいこの世界じゅうでわたしの見てきた話をしてあげますよ。」と、木に向かって雲はいいました。

木は、ほんとうに夢とばかり思ったのです。そして、このときばかりは、自分ほど、幸福なものは世の中にないと思いました。いつまでも木は、この美しい雲をば見ていたかったのです。また、翼があったら、自分も飛んで雲の後を追って、いっしょに旅をしたいと思いました。しかし、木には、もとよりそれができなかったのです。そのうちに、だんだん雲の姿は、遠ざかってしまいました。

その日から、木は、この雲の姿を忘れることができませんでした。そして、もう一度ここへやってくるといった雲の言葉を思い出して、毎日さびしい日を送っていました。

しかし、それからというものは、けっして、そのような美しい雲をば木は、見なかったのです。夏も去ってしまい、秋にもなったけれど、この美しい雲は、ふたたび目のとどくかぎり、空に姿を現しませんでした。

木は、深い、深い、愁いに沈みました。毎日、山の頂を通る雲は、灰色の物悲しいものばかりでありました。

木が、こうして悲しみに沈んでいましたとき、からすがやってきて、

「なんで、そんなに悲しんでいるのですか?」と、木に向かって聞いたのであります。

木は、心の中の悲しみを隠していることができませんでした。そして、からすが、さもしんせつにいってくれましたので、木は雲の話をして、

「おまえさんは、羽があって、遠いところまで旅をしなさるから、もし、その雲をごらんになったら、私に教えてください。」と、木はからすに向かって頼みました。すると、からすは、「そうです。私は、海の方へも飛んでゆきます。また広い野原へも、ときには、村へも飛んでゆきます。けれど、このごろはどこへいっても、これと同じ曇った空色で、かつてそんな美しい雲を見たことがありません。私も気をつけていますが、もしつぐみがここにきましたら、よく聞いてごらんなさい。あの鳥は、諸国を飛びまわりますから……。」と、木に向かっていい

ました。

　哀れな木立は、さも頼りなさそうに見えました。からすは、やがて別れを告げて去ってしまいました。それから幾日もたった冬のはじめです。つぐみが、どこからかやってきて、この木の枝に止まりました。木は、からすのいったことを忘れずに、さっそく雲の話をしました。

「つぐみさん、どこかでこんなような雲をごらんになりましたか?」と、木は、鳥に向かって聞きました。

　敏捷そうなつぐみは、小さなくびをかしげながら、考えていましたが、

「あ、見ましたよ。それは、ここからは、たいそう遠いところであります。海を越えて、あちらのにぎやかな都会でありました。ある日の晩方、私は、その都会の空を、急いでこっちに向かって旅をしていますと、ちょうどあなたのおっしゃる美しい雲が、都会の空に浮かんでいました。下には、とがった塔や、高い建物などが重なり合って、馬車や、自転車などが往来の上を走っていました。そして、街の中は、たそがれかかって、燈火が、ちらちらと水玉のようにひらめいていました。」と、つぐみはいいました。

　これを聞いていた木立は、深いため息をもらしました。

「いまは、そんなに遠いところに、雲はいってしまったのですか。」と、木は、さびしさにたえられなかったけれど、雲の無事なのを聞いて安心いたしました。

「どうか、また、その雲をごらんになったら、私のことをよく告げてください。」と、木は、

つぐみに頼みました。

「きっと、あなたのことを雲に告げますよ。私は、もう明日はここを去って、遠くへゆきますから、また、どこかで、あの雲を見ますでしょう。」と、つぐみはいいました。

木は、またこのつぐみとも別れなければなりませんでした。こうして、さびしく山の上に一人いつまでも残されたのであります。

それからも毎日、情ない風は木を揺すりました。雪は、舞ってきて枝にかかりました。そして、明けても暮れても、灰色の雲は、頭の上をゆきました。

いつになったら、木は、あの美しい雲の姿を見るでありましょう。また、夏がめぐってくるには、長い間があったのです。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集　3」講談社
　　1977（昭和52）年1月10日第1刷
　　1981（昭和56）年1月6日第7刷
初出：「読売新聞」
　　1922（大正11）年3月22～25日
※表題は底本では、「山《やま》の上《うえ》の木《き》と雲《くも》の話《はなし》」となっています。
入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班
校正：本読み小僧
2014年4月23日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

山の上の木と雲の話

小川未明

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/